

都市単身者住居における生活共有空間についての考察と提案

A Study on Common Space in Urban Housing Complex for Single Residents

10923003 石井千絵

主査 篠原聡子教授

副査 定行まり子教授

副査 平田京子准教授

生活共有空間、個室、単身者、ワンルームマンション、都市居住
common space, private room, single resident, one-room mansion, urban dwelling

序論

第1章 研究の背景と目的

1. 1 研究の背景と目的

近年、家族形態は大きく変化している。高齢化、晩婚化、非婚化、離婚率の増加などを背景に居住の基本単位は縮小を続け、単身世帯の増加が著しい。特に、2020年には都市部の4割強が単身世帯となると言われている。かつては一時的な仮住まいとされてきた1人で住む、という居住形態は一般に広く認識され始め、数多く供給されるようになってきた。

都市にあふれる単身者の生活は今、多くがワンルームマンションなど単身者向けアパートの一室に置かれている。ワンルームマンションは1980年代に急速に普及し、狭小な空間が単身者の生活の基本単位となって規則的に積まれた建物が都市に並ぶようになった。居住者同士のコミュニケーション、地域とのつながり、生活の支え合いを失いながら増え続けた単身者住居は、地域社会の中で切り離され、孤立した「見えない単身者像」を作り上げている。

人との関わりを持たず、孤立する単身者という状況は、独立性の高さが求められるワンルームマンションの狭い個室の中で完結した生活が作り出しているのではないだろうか。無機質に並んだ小さな箱に押し込められた生活は、都市に依存することはあるが外に表出することはなく、画一的な住居とその配列が個人の持つキャラクターを失わせ、味気ない人間関係を生む。

単身者は「個」という単位で社会と直接的に関わり合い、支えていく存在にならなければならない。都市における単身世帯のための住宅は、多様化する単身者の生活を支え、他者や社会とのつながりを育むための居住スタイルとして提案される必要がある。

単身者の生活を隔離する一般的なワンルームマンションから、豊かな人間関係を自然に作り出し、自分なりの生活を描ける多彩な環境を持った単身者住居へと、今求められる単身者住居の可能性を模索していかなければならないと考える。

そこで本研究では、「生活共有空間」の存在に注目する。生活共有空間が単身者の生活にどのような影響を与えるのか。単身者のために考え得る豊かな生活とはどのようなものか。「個」として孤立していく単身者の暮らしを再考するため、社会的背景と単身者住居の供給と需要を把握した上で多様な生活共有空間の在り方を分析し、新しい生活共有の仕方をこれからの単身者住居に取り込む提案を行う。本研究は、これからの単身者住居の在り方と生活共有空間の可能性を探り、1つの個室では完結しない、1人の生活が居住者の数だけ重なっていきけるような、画一的な一般的ワンルームマンションに代わる単身者住居のオルタナティブを作ることとしている。

1. 2 論文の構成

本論文は序論となる第1.2章、本論として第3章があり、第4章に設計提案を行う4部構成となっている。

第1章、第2章では現代の単身世帯の増加に伴う社会の変容やその要因、単身者住居として一般解となっているワンルームマンションに対する問題意識を背景に、これまで供給されてきた単身者住居について概観し、単身者の住まいに求められているものを探る。

本論となる第3章では、序論から得た単身者住居の新しい流れを実現する、新しい生活共有空間の在り方を提案するため、ワンルームマンションを含む、生活共有空間となり得る共用部を持った多様な住居形態の事例を16挙げ、それら事例の生活共有空間と個室の

機能的、空間的関係性について比較、分析を行う。類型化した生活共有空間から、個室との新しい関係の可能性を導き出し、提案の方針を立てる。

第4章では、考察したコンセプトを元に、新しい生活共有空間を持った单身者住居を提案し具現化する。

序論

第1章 研究の背景と目的

↓

第2章 单身者住居の系譜

↓

本論

第3章 生活共有空間の可能性

3. 1 「集まって住む」ことへの注目

↓

3. 2 対象事例の選定

↓

3. 3 生活共有空間を持つ单身者住居の事例分析

3. 4 生活共有空間の分析

3. 5 まとめと方針

↓

第4章 新しい单身者住居の提案

■「共用部」と「生活共有空間」の定義

本研究において、居住者が共同で使用することのできるように計画された空間を「共用部」、居住者同士が行為を共有しながら生活を営む空間を「生活共有空間」と定義する。計画された共用部の中でも、生活の関わり合いが意識されるものを生活共有空間と位置付け、区別する。

第2章 单身者住居の系譜

2. 1 統計データに見る单身者の動向

2. 1. 1 单身者世帯の増加とその背景

单身者世帯数は2005年では1445万世帯で全世帯数の29.5%を占め、2000年に比べると12.0%の増加となっている。国立社会保障・人口問題研究所作成の統計によると2025年には单身世帯数は34.6%に膨らみ、最大家族類型であった夫婦と未婚の子供から成る世帯を上回ると予測されている。

单身世帯数の増加は、都市部において顕著に見られ、特に東京23区内の单身世帯数は2005年度に一般世帯数の46.09%、2020年度には47.12%を占めるようになると推計されている。

都市部において单身者世帯が増加している背景とし

て、都市部への働き、少子高齢化により高齢单身者が増えたこと、晩婚化、非婚者（生涯未婚者）、離婚率の増加、女性の社会進出、インフラの整備により单身者が不自由なく生活できる環境が都市部に確立されていることなどが挙げられる。

2. 1. 2 ワンルームマンションの動向

单身者の住居選択として一般的にワンルームマンションを挙げることができる。その供給数は都市部において安定して伸びている。しかし、ワンルームマンション入居者の生活態度や、地域の一体としての意識の欠如が問題視されたことから、ワンルームマンションの建築を規制する動きが強まっている。東京23区では、ワンルームマンションの年間供給口数が約8000口に達した2003年前後に一斉に規制が制定された。

今後も单身者の増加はますます顕著になることが予想され、单身者住居の需要は更に高まっていくだろう。ただワンルームマンションを規制するだけでは、定住者の増加やコミュニティ形成の根本的な解決法にはならない。ただ排除するのではなく、单身者住居の在り方を再考し、人とのつながりを心地よく形成できる住まいの在り方を新しく提案していく必要がある。

2. 2 单身者住居の変遷

单身者の賃貸住居は、関東大震災、戦争、戦後の高度経済成長、バブル崩壊、IT情報社会などあらゆる時代背景に呼応し、あらゆる形態のものが登場した。

明治時代に下宿屋から賃が高めた共同住宅が始まり、関東大震災の復興のためには不燃化計画の一環として鉄筋コンクリートの单身者住居が多く建設されるようになり、店舗併用型など都市型住宅や賃の高い都市居住を目指すアパートなど都市の住まい方が模索された。近隣との関わりが活発であった時代には、御茶ノ水アパートメントや同潤会による計画など、共用部を充実させて单身者の豊かな生活を促す单身者住居が見られる。戦後は共同生活が基本となる本質アパートが普及したが、1968年黒川紀章による個室群住居の発表、1972年黒川紀章による中銀カフセルタワービルの建設と、近年では单身者を「個」として確立させる考えが広まっていった。この個室化の流れからワンルームマンションが見られるようになり、生活を共有することなく、他人と一切関わらなくてもよいという自由な生活が一般的单身者住居となっていった。

2. 3 現代の

单身者の増加
様化に伴い、世
くの新しい單身

例えば、デザ
を重視する居住
してはコーポラ
他に、最近では
る。これらは共
全性でのメリッ

また、「單身
である」という
ンルームマンシ
持つ集合住宅と

ント、長谷川豪
と、機能的、立
り、住まい方は
新しい形を見る

■新しい流れへの

時代によって
多様な提案が為
いくと、居住者
者へ委ねられる
することができ
ルに合わせてそ
る、バリエーシ
ているのではない
領域となる生活
複雑な空間構成
人とのつながり

本論

第3章 生活共有空間

3. 1 「集まって

多様な居住形態
生活を共有しな
直そうという動
まっている。「コ
いった要素を取り
個人として多様
て、シェア住居が
とが、空間のバリ

2. 3 現代の単身者住居

単身者の増加、単身者のライフスタイルの変容や多様化に伴い、世間でも単身者住居に注目が集まり、多くの新しい単身者住居が提案されるようになった。

例えば、デザイナー・ズマンションなど空間の自由度を重視する居住形態や人との関わりを重視する形態としてはコ・ホラティブハウス、コレクティブハウスの他に、最近では大小規模のシェア型住宅が出現している。これらは共に住まうことで、効率性や経済面、安全性でのメリットも求められている。

また、“単身者住居の個室は必要最低限の生活場所である”という概念を打ち破り、画一的な箱が並ぶワンルームマンションからの脱却を図ったコンセプトを持つ集合住宅として、西沢立衛設計の船橋アハートメント、長谷川豪設計の練馬のアハートメントを挙げると、機能的、立体的に変化のある居住空間を様々な作り、住まい方はそこで暮らす居住者に委ねる、という新しい形を見ることが出来る。

■新しい流れへの展開

時代によって変化し、単身者のニーズに合わせ多種多様な提案が為されている単身者住居の系譜を追っていくと、居住者自らが己の住まい方を模索する、居住者へ委ねられる住まいの提案を近年の傾向として抽出することができる。単身者は今、自分のライフスタイルに合わせてそのときで選び取っていくことのできる、バリエーションを内包した単身者住居を必要としているのではないだろうか。居住者同士の生活の中間領域となる生活共有空間は、バリエーションを持った複雑な空間構成によって単身者に必要とされる多様な人とのつながりを作る可能性を持つ。

本論

第3章 生活共有空間の可能性

3. 1 集まって住むことへの注目

多様な居住形態を持つ単身者住居の中でも、近年、生活を共有しながら集まって住むことの良さを見直そうという動きが、供給される側、する側、共に高まっている。「コミュニティ」や「つながり」「交流」といった要素を取り入れ、家族という枠にとらわれずに個人として多様な生活や住まい方ができる選択肢として、シェア住居が注目されている。生活を共有することが、空間のバリエーションの多さや豊かさ、人との

コミュニケーション、多彩な生活環境を生み、今後単身者の暮らしを考えていく上での大きな可能性となっていこう。

3. 2 対象事例の選定

都市における単身者のための新しい生活共有空間の在り方を提案するにあたり、これまでに計画された生活共有空間を持った単身者住居の中から、提案的な内容を含むと思われる事例を選定し、分析、考察を行う。

3. 2. 1 単身者住居の個室機能分類

生活共有空間の質を考察するために、まず専有する個室に生活で必要とされる機能がどれだけ備わっているかを見ていく。個室の機能として、日常生活内で必需である生活機能のトイレ、バス、必要な家事機能のキッチン、ランドリー、個人の領域を確立させる出入り機能の玄関、と5つの機能を挙げ、これらの有無によって個室を以下に計すように分けていく。

個室完結型	
個室内に機能が多く備わり生活が完結する	
A 完結 個室内に完全に機能が揃っている	B 一部依存 ランドリーだけ共有している
共用部依存型	
個室に備わる機能が少なく、共用部で補う	
C 半依存 個室機能が幾つか欠けている	D 完全依存 個室に機能を全く持たない

3. 2. 2 単身者住居の共用部機能分類

次に、共用部に備わっている機能についても5つの機能を挙げてその有無を同じように分類する。

個室主体	
共用部の機能が2つ以下のもの	
a 不備 動線以外の共用部がない	b 付加 共用部機能により生活を補うことができる
共用部重視	
共用部の機能が3つ以上のもの	
c 充実 積極的に共用部機能が備えられている	d 完備 全ての機能が共用部に備わっている

機能量がその住宅の性質を一概に決めるわけではなく、個室と共用部の関係性が重要となる。

3.2.3 対象事例の分類

多種多様な個室の質、共用部の質を取り上げ、一般的なザンルームマンションと比較するように、生活共有空間となり得る特徴的な共用部を持っているシェア住居、コレクティブハウス、単身寮、他雑誌などに取り上げられている単身者住居 16 事例を対象として分析を進めることとする（表 1）

対象事例を前項の個室機能、共用部機能によって分類し、マトリックス表を作成してその関係性を各エリアで推考していく（表 2）

・個室完結 個室主体：個室での生活が尊重され、共用部の付加に生活共有の可能性がある

・共用部依存 個室主体：適度な距離感と支え合いが生まれると考えられる

・個室完結 共用部重視：個室か共用部か選択性が強く、コミュニティが意識される

・共用部依存 共用部重視：生活が共同化され、共用部が中心的存在を占めている

次項から事例ごとに具体的に分析していくが、共用部に機能を持たない個室完結 共用部不備型【Aa】から個室に機能を持たない共用部完全依存 共用部完備型【Dd】に向けて居住者の意識としての「共有の度合い」が強まっていくと考えられる

表 1 対象事例一覧(竣工年順)

竣工年	名称	掲載媒体	戸数	住居形態
1991	青春部族 女子寮	新建築 91, 10	20	単身寮
1992	読者の生活 女子寮	新建築 92, 5	11	共同住宅、店舗
1994	コルポ牧場	新建築住宅 94, 8	22	共同住宅
1998	YKK 黒部寮	新建築 98, 11	100	単身寮
1999	風の村	建築設計 資料 103	57	共同住宅 (シェアハウス)
2002	鳥飼共生活 木の家	新建築 2003, 1	10	共同住宅 (シェアハウス)
2002	松原エレンズ	新建築住宅 03, 10	7	シェア型住宅
2003	久米町のゲストハウス	新建築 04, 1	10	共同住宅
2003	かんかん 木	新建築住宅 03, 10	28	共同住宅 (コワーキング)
2005	丸山邸	新建築 06, 2	6	共同住宅
2007	グランドウール ス学生		32	共同住宅
2008	マッシュロム 西岡分室	新建築 09, 2	9	共同住宅、店舗
2009	コロバマアハ トメント	新建築 10, 2	4	共同住宅
2009	シェアプレイ ス東部会館	ひびき 不動産 不動産	57	シェア型住宅
2009	ト北沢 pinos	ひびき 不動産 不動産	9	シェア型住宅
2009	鳥飼共生活 木の家		11	共同住宅

表 2 対象事例 個室 共用部機能分類

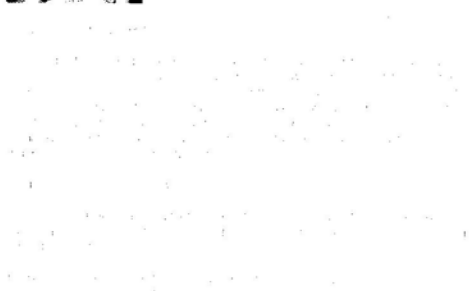
個室機能	共用部機能	共用部機能分類			
		個室完結型		共用部依存型	
		A	B	C	D
		完結	一部依存	半依存	完全依存
個室主体	a 不備型	青春部族 女子寮 丸山邸			
	b 付加型	コロバマアハ トメント	コルポ牧場	久米町のゲストハウス	
共用部重視	c 充実型		マッシュロム 西岡分室 かんかん 木	読者の生活 女子寮	
	d 完備型			YKK 黒部寮 鳥飼共生活 木の家	ト北沢 pinos 松原エレンズ 鳥飼共生活 木の家 青春部族 女子寮 風の村



03



＜事例シート 1＞



＜事例シート 2＞

3. 3 生活共有空間を持つ単身者住居の事例分析

前項で挙げた事例について、個室の質と共用部の質の関係性をそれぞれ上のようなシートを作成して記し、生活共有空間について具体的に分析していく

■分析の手法

＜事例シート 1＞

建築概要：事例の基本的な情報

名称や設計者、総戸数における単身者世帯の構成、居住者人数、居住者の年齢構成、面積など

建物構成

事例の平面図や写真、事例の簡単な説明を記す

＜事例シート 2＞

個室と共用部の機能

個室に備えられている機能、共用部に備えられている機能の有無を示す。リビングや庭、その他にも共用部を特徴づける機能があれば、その場合も記す

個室配列

個室同士がどのような配列で共用部や外部とつながっているかをネットワーク図として示す

個室・共用部・空間構成図

個室と共用部の空間構成を図で表し、機能がどのように配置されているかを示す

事例の考察

・考察Ⅰ 個室と共用部の機能関係

個室に備わった機能と共用部に備わった機能から、その関係性によってそれぞれの空間が持つ性質について考察する。最小限の個室機能を補完する共用部との関係、個室の生活にプラスαを与える関係、ソフトでのつながり、共用部が持つ性質も居住者の生活に影響を与える。これらを事例ごとに見ていくことで、その事例での生活共有空間の在り方が分かる

・考察Ⅱ 個室と共用部の空間構成

個室と共用部が空間的にどう構成されているか、それによってどんな効果が生まれているかを考察する。空間構成には動線も大きく関わり、空間的な動線である場合、居住者の生活の中に組み込まれている可能性がある。動線と共用部の重なりや、生活が表出する仕掛けがあると、動線は生活共有空間としての質を持つ。また、ベッドのある個室と共用部、私的空間がどのように配列されているかを見ることで、その事例の中で認識される領域の広がりを見ることが出来る

・キーワード

上記の視点から事例を考察した結果、抽出できた空間的特徴をキーワードとして記述し、分析や提案の手がかりとする

・ふくらみ動線空間<02,03,04,08,11,14,16>

生活共有空間として認識される広がりのある動線空間をこの言葉で表し、そこに機能や個室の緩衝領域が備わることで生活に深く根付いてくる。動線や私的領域と、機能が持っている領域が広がりのある空間の中で互度良い距離感を持って存在することができ、生活の一部として居住者同士のコミュニケーションや、触れ合いが自然に起きると期待される。



・オープンコモン<02,03,04,13,16>

地域や街に開放できる場所として計画された共用部。オープンになる場所が個室間の隙間のような外部となっており、自然と入り込むことができるものと、用意された室内で企画やイベントといったシステムとしてオープンになるものがある。03 ヨコハマアハートメントは半外部であり、両方の質を持った自在型と言える。

・分散構成<02,03,04,09,11,14>

ユニット自体の分散、収納スペースという私的領域の分散、共有する機能の意図的な建物内での分散など。それによって機能同士の緩衝領域が形成される共に、居住者の分散された私的領域をつなぐ空間が重なり合って、一体感を伴った共有意識が生まれると考えられる。

・選択性<03,05,06,07,09>

選択性があることで、自分の都合に合わせて共用部を利用することができ、個人の自由度が高いと言える。

・ソフトのつながり<06,07,09,10,12,13,14,16>

共同体としてソフト面でつながりを持っている事例。生活共有という前提のもと計画された事例で、居住者の自己選択としての心構えや企画者、運営者による介入があることで、居住者同士のつながりが促進される面があると考えられる。

・関係性のバリエーション<08,15>

個室と共用部の関係性が一つではない事例。定まっていない個室と共用部の関係性が多彩な生活スタイルを生むと考えられる。居住者に生活共有の在り方を委ねているとも言える。

3. 4. 2 対象事例の生活共有空間

次に、これまでの分析、考察結果から事例を生活共有空間の在り方で分類していく。生活共有空間の分類は次のように設定する。

I 非共有型

生活を共有するような空間が備わっていない

II 空間共有型

空間を共有することによる利点があり、共同生活が第一の目的ではない

III 空間共有 共同選択型

自在な空間設定により、空間共有か協働が選択して生活できる

IV 共同型

協働することが前提としてあり、意識を持って生活する必要がある

個室と共用部の機能関係をキーワードによる特徴づけと合わせて概観することで、事例の中で生活共有空間の在り方がどのようなになっているか分かる。事例を検証した上で I～IV の分類分けを行ったところ、以下のように分類された。

分類	名称
I 非共有型	グラントウルース弥生 森山邸
II 空間共有型	高島平の集合住宅 YKK 黒部寮
III 空間共有 共同選択型	ヨコハマアハートメント コロン松波 マージョ西国分寺 久が原のゲストハウス 西春館製菓女子寮 都心型・高層シェアハウス かなかみ森 真鶴共生舎 木の家 シェアプレイス東神奈川 下北沢 pino 松陰コモンズ 風の村
IV 共同型	

・ふくらみ動線空間：02,03,04,08,11,14,16・

生活共有空間として認識される広がりのある動線空間をこの言葉で表し、そこに機能や個室の緩衝領域が備わることで生活に深く根付いてくる。動線や私的領域と、機能が持っている領域が広がりのある空間の中で互度良い距離感を持って存在することができ、生活の一部として居住者同士のコミュニケーションや、触れ合いが自然に起きると期待される。



・オープンコモン：02,03,04,13,16・

地域や街に開放できる場所として計画された共用部。オープンになる場所が個室間の隙間のような外部となっており、自然と入り込むことができるものと、用意された室内で企画やイベントといったシステムとしてオープンになるものがある。03 日コハマアハートメントは半外部であり、両方の質を持った自在型と言える。

・分散構成：02,03,04,09,11,14・

ユニット自体の分散、収納スペースという私的領域の分散、共有する機能の意図的な建物内での分散など。それによって機能同士の緩衝領域が形成される共に、居住者の分散された私的領域をつなぐ空間が重なり合って、一体感を伴った共有意識が生まれると考えられる。

・選択性：03,05,06,07,09・

選択性があることで、自分の都合に合わせて共用部を利用することができ、個人の自由度が高いと言える。

・ソフトのつながり：06,07,09,10,12,13,14,16・

共同体としてソフト面でつながりを持っている事例。生活共有という前提のもと計画された事例で、居住者の自己選択としての心構えや企画者、運営者による介入があることで、居住者同士のつながりが促進される面があると考えられる。

・関係性のバリエーション：08,15・

個室と共用部の関係性が一つではない事例。定まっていない個室と共用部の関係性が多彩な生活スタイルを生むと考えられる。居住者に生活共有の在り方を委ねているとも言える。

3. 4. 2 対象事例の生活共有空間

次に、これまでの分析、考察結果から事例を生活共有空間の在り方で分類していく。生活共有空間の分類は次のように設定する。

I 非共有型

生活を共有するような空間が備わっていない。

II 空間共有型

空間を共有することによる利点があり、共同生活が第一の目的ではない。

III 空間共有 共同選択型

自在な空間設定により、空間共有か協働が選択して生活できる。

IV 共同型

協働することが前提としてあり、意識を持って生活する必要がある。

個室と共用部の機能関係をキーワードによる特徴づけと合わせて概観することで、事例の中で生活共有空間の在り方がどのようなになっているか分かる。事例を検証した上で I～IV の分類分けを行ったところ、以下のように分類された。

分類	名称
I 非共有型	グラントウルース弥生 森山邸
II 空間共有型	高島平の集合住宅 YKK 黒部寮
III 空間共有 共同選択型	日コハマアハートメント コルテ松波 マージョ西国分寺 久が原のゲストハウス 再春館製菓女子寮 都心型・高層シェアハウス かんかん森 真鶴共生舎 木の家 シェアプレイス東神奈川 IV 共同型 下北沢 pino 松陰コモンズ 風の村

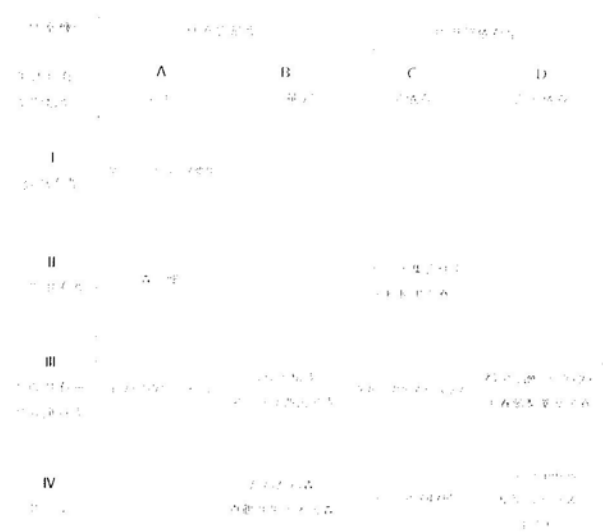
3. 4. 3 求められる単身者住居の生活共有空間とは
前項で分類した中で、単身者居住における汎用性の高いタイプとしてⅢ空間共有・共同選択型のタイプに注目する。これまでの分析、考察から、生活を共有すること、単身者住居としての豊かさを兼ね備え、居住者が選択性やバリエーションを持って生活を自ら作り出していく在り方であると考ええる。

最後に、対象事例について個室機能の分類と共用部機能の分類を生活共有空間の分類と対応させ、生活共有空間の在り方との関係性を見ていく。

・個室機能・生活共有空間類型・



・共用部機能・生活共有空間類型・



この表から、Ⅲ空間共有・共同選択型が個室機能、共用部機能によって決められるものではなく、全てのタイプに渡って実現することが可能であることが分かる。一つの事例において、個室の機能、共用部の機能

は決まっており、通常事例の中の居住者は同じような生活環境を持つ。個室が共用部かの選択性や空間のバリエーションのように、一つの事例の中で個室の機能にバリエーションを持たせたり、生活共有空間の質に変化をつけたり、固定されない生活が彩りのある住まいの重なりを実現するのではないかと空間共有・共同選択型を基本に、自分の生活を自分で描いていくような生活共有の在り方について考えていきたい。

3. 5 まとめと方針

自己完結した生活は自由だが様々なリスクも抱えている。単身者のライフスタイルの多様化に答え、一人一人がそれぞれの豊かさを得られ、なおかつ他者と生活を共有するメリットを享受できる住まいの選択肢ができるべきではないだろうか。生活共有空間はそのプログラムや空間構成によって、単身者のための様々な生活に対応し得る可能性を持っている。

個室と生活共有空間の多様な関係性が、一人の生活と他の一人の生活が重なり合うような多彩な住まい方を可能にすると考える。



■単身者住居における生活共有空間の有効な手法

- ・ふくらみ動線空間：広い動線空間を生活動線として作り、生活共有空間としての意味を持たせることで他の居住者と自然に関係を築くことができる。機能の分散や立体的な構成で豊かな動線を作る。
- ・選択性：専有している個室、フラスコの付加価値を与える共用部両方に機能構成のバリエーションを与える。一人の生活は一通りの生活ではなく、生活や状況に合わせて幾つかのバリエーションがあることで、居住者の生活の幅を広げる。
- ・ユニットの形成：機能に適した人数と距離感を考えて生活共有空間を計画することで、空間の質にヒエラルキーを形成し、生活に負荷を与えない共有関係を築くことができる。

■一般的なワンルームマンションからの脱却

以上をふまえ、普及し続けるワンルームマンションに代わる新しい単身者の住まい方を提案したい。

第4章

4. 1 提

新しい生
にあたり、
者の住まい
1人の生活
除かれ周囲
また、都市
する機能や
居住者が自
られる住ま
その生活を

4. 2 新

提案する
室と全体で
居住者は自
有し、足り
結ぶ動線空
選び取って

居住者動線

個室と個室
在させ、立
よってつな
在な生活共
居住者同士
できる。決
こらなかつ
し、単身者
られる。自
ことにより
個室の持つ
択し、自らの

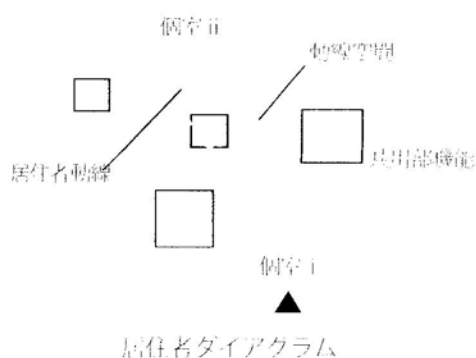
第4章 新しい单身者住居の提案

4.1 提案の社会的意義

新しい生活共有空間を持った单身者住居を提案するにあたり、その社会的意義を考えてみると、まず单身者の住まい方の幅を広げて生活や心を豊かにし、1人1人の生活が表出して「見えない单身者」の壁が取り除かれ周囲に開かれる存在になることが期待される。また、都市における单身者の年齢層の広がりをも許容する機能や空間が固定されない自在な共有の在り方や、居住者が自ら空間を選び取り生活を描いていく、委ねられる住まい方が、都市における单身者の自立を支え、その生活を社会に位置付けると考えられる。

4.2 新しい生活共有の仕方

提案する单身者住居は居住者の専有する2つの個室と全体で共有する大きな動線空間によって構成する。居住者は自分の生活スタイルに合った2つの個室を専有し、足りない機能や空間については共用部や個室を結ぶ動線空間に備えられた機能空間を、そのときどきで選び取っていくことができる。



個室と個室から分解された機能や空間を建物内に散在させ、立体的目つ変化があり伸縮自在な動線空間によってつないでいく。それにより、ひとつつながりの自在な生活共有空間の中で居住者の生活が重なり合い、居住者同士距離を保ちながら自然と交流を持つことができる。決められた機能や決められた動線の中では起こらなかった、出会いやゆとりから多様な生活が発生し、单身者の生活、感情をより豊かにしていくと考えられる。自在な生活共有空間で全体が構成されていることにより、居住者は自分の生活スタイルに合わせて、個室の持つ機能、使用する共用部、自分の居場所を選択し、自らの生活を作っていくことができる。

4.3 敷地の選定

■敷地となり得る場所

本研究では、单身者住居のオルタナティブの1つとして提案することを目的としているので、提案は敷地の要素に大きく影響されることはなく、汎用的なプランとなることを目指す。ただし、周辺地域に与える影響、受ける影響を考慮した上で計画を行い、地域に根差した单身者住居となるように配慮する。都市部である東京23区内で单身者世帯が多く、ワンルームマンションが多く建設されている場所から敷地を選定する。

■豊島区雑司ヶ谷3丁目

敷地とする豊島区雑司ヶ谷は池袋、新宿といった賑わう都市の狭間にある。豊島区では、世帯構成が全世帯のうち単身世帯が約56%という状況であり、また一方では、区内の住宅で30㎡に満たない集合住宅の占める割合が約40%と、いずれも23区内で最も高くなっているとして、狭小住居集合住宅の課税を行っている。

雑司ヶ谷3丁目 敷地



○雑司ヶ谷3丁目 敷地データ

容積率：300%、建ぺい率：60%

敷地面積：約300㎡、第1種中高層地域

敷地周辺には学校があり、若者と高齢者層が混ざっているような地域であると言える。現在敷地には地上3階建の单身者住居が建てられている。専有面積27.0～43.4㎡程度の住戸が14戸入っているデザイナーズマンションであり、提案はほぼ同規模で行う。

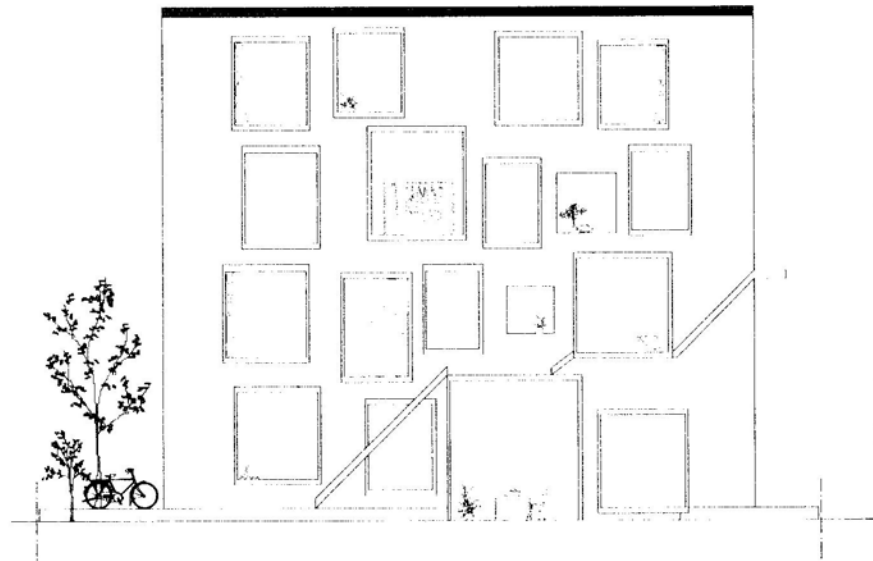
■参考文献

- ・斎藤智子：居住者評価からみる生活共有空間について、日本女子大学大学院2003年度修士論文
- ・五ノ井幸衣：曖昧境界生活圏域「ワンルームマンション」Re. 213ヤフコト「東京の中心市街地に建つ生活共有で成る計画」日本女子大学大学院2007年度修士論文
- ・藤原勝子、大崎寿美子、小泉雅子：ライフスタイル研究会：変わる家族と変わる住まい「在宅家族」のための住まい論、筑戸社、2002

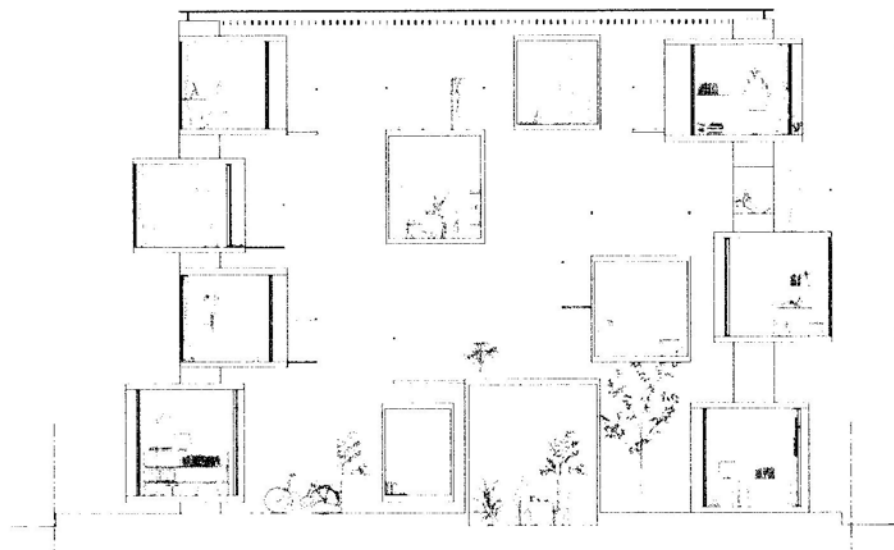
設計提案

新しい生活共有空間を持った
20戸の単身者住居

East elevation



B-B' section



1st level plan

